



「チャレンジシティ仙台」は 産学官が足並みをそろえて 目的地に向かうための道標です。

仙台活性化まちづくり2030検討委員会 委員長
東北大学大学院工学研究科 准教授

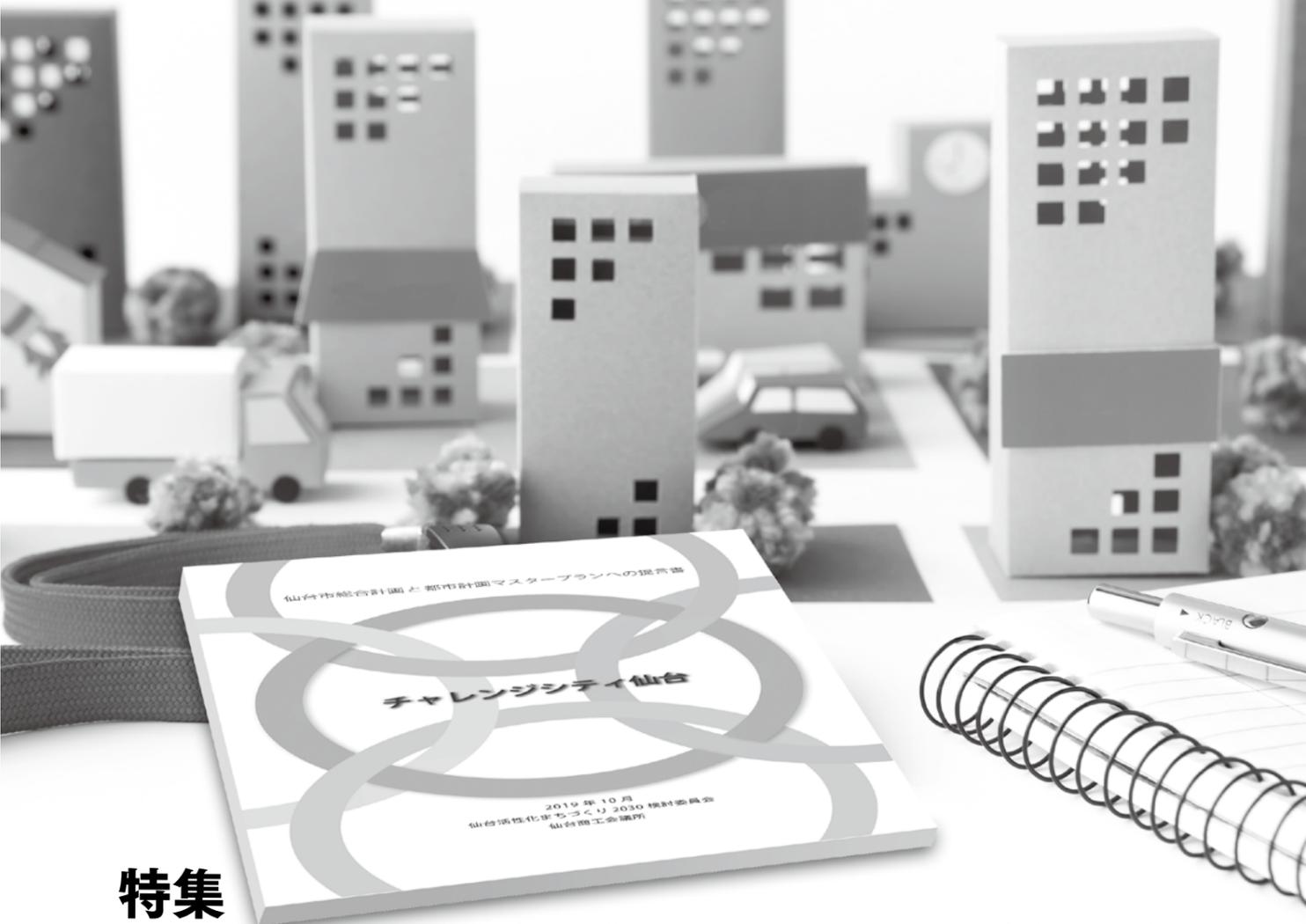
うぼら みちお
姥浦 道生氏

〈プロフィール〉
東京大学法学部第一類を経て、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程満期退学。豊橋技術科学大学、大阪市立大学助手を経て2008年より現職。「都市計画・建築計画」が専門。

**将来に対する危機感を共有して
東北の未来を考える**

東日本大震災からの復興が一段落しつつあるいま、仙台の経済は大きな転換点にあります。仙台市の経済活動別市内総生産の推移(図1参照)を見ると、建設業は2006年度の約2700億円から、2010年度には約2000億円に落ち込みました。しかし、震災後の2013年度以降は6000億円近くを推移しています。つまり震災後の市内総生産のうち、約4000億円分を建設業が押し上げてきたわけです。ですから、今後、復興需要の終息による経済への影響が懸念されます。また、少子高齢化や人口減少によって生じるさまざまな課題に対する解決策を講じる中で、東北の中枢都市である仙台には、経済を持続的に発展させるという使命があります。その使命を果たすためには、経済活動の中心地である「都心部」を活性化することが喫緊の課題です。このような問題意識をもってまとめられた提言が、「チャレンジシティ仙台」なのです。

まちづくりに関する計画というものは、そのまじがもつ「良さ」や「魅力」からスタートすることが当たり前です。しかし、この計画の現状分析では、仙台の良いところには触れておらず、問題点だけを示しました。それは、あえて強い言葉を使うなら、良いところを伸ばして「こう」という生ぬるいことを言っている状況ではないからです。いわば危機感が、この提言の出発点なのです。仙台は震災復興に取り組む中で、都市再生に遅れをとったとも言われています。ですから、なおのこと危機感をもつて仙台・東北の未来を考え、都心部のあり方を考えなければならぬと思います。



特集

10年後の将来を見据えて いま転換点を迎える 仙台のまちづくり

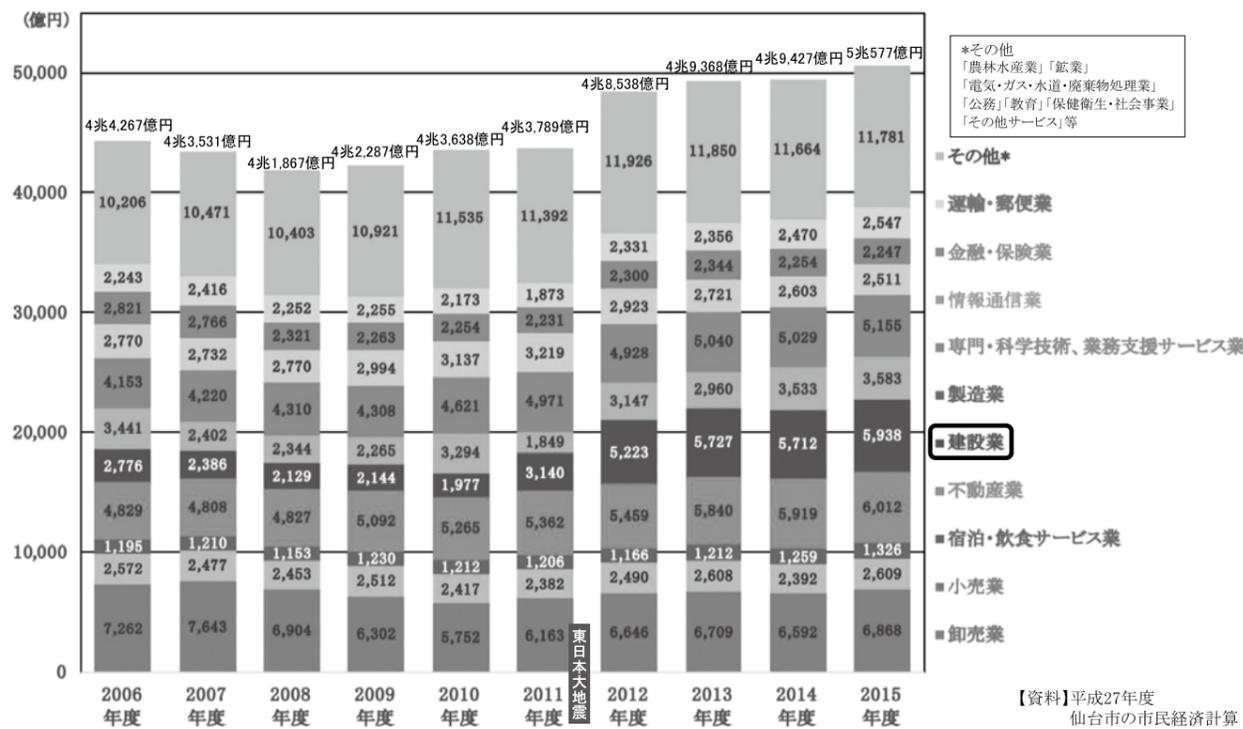
仙台市では昨年「せんだい都心再構築プロジェクト」を始動させ、2021年度からは新たな「総合計画」と「都市計画マスタープラン」に基づくまちづくりが進んでいきます。

昨年10月に仙台商工会議所では、こうした一連の計画に対して商工業者の声を反映させるべく、当所議員などを中心とした仙台活性化まちづくり2030検討委員会で、10年先を見据えた仙台の将来像として「チャレンジシティ仙台」を取りまとめ、郡和子仙台市長に提言しました。

今号では、検討委員会の委員長を務めた東北大学大学院工学研究科の姥浦道生准教授から、提言に込められた思いやその内容について解説いただくとともに、「次世代放射光施設」や「定禅寺通活性化」といったキーワードを念頭に、まちづくりに携わる方々へのインタビューを通して、将来に向けた仙台のまちづくりを展望します。

図1 仙台市の経済活動別市内総生産(名目)の推移【2006～2015年度】

- 市内総生産が最も低い2008年度(4兆1,867億円)から2015年度(5兆577億円)では、8,710億円(約20%)増加
- その内容を見ると、復興需要(公共投資)による「建設業」(約4千億円弱増)が押し上げている
- 復興需要が終息に向かう中、「建設業」の民間投資の促進と、他の産業も戦略的に伸ばしていく必要がある



5つの指針に基づく アクションプランで 仙台的将来像を実現

仙台的将来像を示した提言書「チャレンジシティ仙台」では、産業と雇用の高度化を図り、仙台発の新たな価値を創出するための政策指針を、5項目にまとめています。

- 指針1 都心の魅力を磨く回遊都市
- 指針2 付加価値を高める研究開発都市
- 指針3 個性で稼ぐ商都
- 指針4 東北の拠点となる国際交流都市
- 指針5 若者を惹きつける文化創造都市

各指針について、アクションプランを含めて、内容を一部ではありますが、ご紹介します。

指針1 都心の魅力を磨く回遊都市

短期的な取り組みとして、民間企業の投資を誘発するような規制緩和などの支援を早期に行うことで、都市機能の高度化を図り、企業誘致やにぎわい創出などで都心の魅力を磨こうというものです。公共投資と民間投資の相乗効果をはじめ、エリアマネジメントの手法によって仙台駅周辺・青葉通は「ビジネス拠点」、片平・土樋は「学都」、勾当台・定禅寺通・西公園・青葉山は「杜の都」といった個性的なエリアを増やすことで、特徴的なにぎわ

図2 「チャレンジシティ仙台」5つの指針



5つの輪が絡み合い相乗効果を生むことで仙台的新しい価値が生まれる。

図3 仙台市「せんだい都心再構築プロジェクト」で示された定禅寺通の将来イメージ



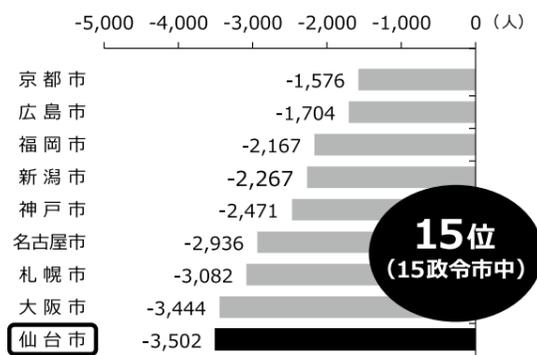
いを生み出していく。なかでも、東北域内はもとより、インバウンドを含めて、仙台ならではの魅力を発信するとき、軸になるのが「定禅寺通」です。この、世界に類を見ない、広く美しい仙台のシンボルストリートをはじめ、地域の財産をどう生かしていくのか。それが大きな課題です。

では、定禅寺通のにぎわいをどのように生み出すのかということですが、これまでは週末に開催されるイベントの利用が多かった定禅寺通エリアを、空間自体から変えていくということ、定禅寺通の「パークストリート化」を提案しています。簡単に申しますと、歩道を広げて、週末だけでなく、日常的にゆったりくつろげる公園のような通りにしようということ。具体的には、沿道のカフェやレストランなどの店舗と一体となって歩道にイ

スやテーブル、ソファなどを設置したり、地域の農産品を売る仮設店舗を出したり、ご飯などを売るケータリングカー（移動販売車）を停めたり。昨年はこの形式で社会実験も実施されています。これまでも車中心で考えられてきた空間を、人が食べたり、飲んだり、楽しんだりする人が使う「人中心」の空間にシフトさせていきましょうということ。また、定禅寺通エリアでは、市庁舎の建て替えや宮城県民会館の移転改築が検討されています。特に、県民会館の移転が決定した場合、跡地をどう活用するのかが定禅寺通の魅力を高めるカギになると思います。昨年、仙台市が「都心再構築プロジェクト」を打ち出しました。その内容も考慮しながら、核となる拠点をどのようにデザインするのか、都心部へのアクセスをどのように整備していくのかを、まちに訪れる人たちのライフスタイルと組み合わせながら考えることも、大変重要だと思えます。

以前、私がドイツのドルトムントに留学したときの話ですが、中心市街地のコンサートホールで行われるコンサートの前売り券を購入すると、スタジアムまでの公共交通の運賃が無料になるというサービスを実施していました。例えば、県民会館の跡地が、音楽堂のようなホールになるとしたら、先ほどご紹介したドルトムントの例のように、公共交通を無料にして利用を促進することで、帰りにお酒を楽しむ人

図4 東京圏に対する転入超過数(2017年、東京圏政令市を除く)



出典：住民基本台帳移動報告（総務省統計局）注：住民基本台帳人口（日本人のみ）

指針2 付加価値を高める研究開発都市

仙台の強みの一つとして、多数の大学や研究機関があるということが挙げられます。しかし、これらの機能や人材を生かして「稼ぐ」というところまでは、至っていないのが現状です。そこで、2023年に運用開始予定の次世代放射光施設の活用も視野に、新たな技術や産業を起こすチャレンジ&イノベーションの文化を創り上げることが求められています。この「指針2」を実現する上で、大きな

問題になっているのが、流出人口が非常に多いということです(図4参照)。仙台は東京圏から来る人と、東京圏へ出て行く人の差が、政令市の中で最も多いことをご存じでしょうか。東北大学の学生の約9割が、卒業後に仙台を離れてしまうというデータが物語るように、特に若者の流出が多く、彼らを引き留める手だてが必要です。高い技術や知識を生かした仕事がないと望む若い人たちに、地元に残って稼いでもらう。それができる環境をつくっていくことが、非常に重要だと思えます。

例えば、次世代放射光施設は、産業面に大きなインパクトをもたらすものであることは確かであると考えます。立地も東北大学の青葉山キャンパスという、他都市の放射光施設と比べても都心部に近いところに建設されます。そうした点から、例えば、研究者用の寄宿舎の建設や研究者と企業が交流できるイノベーションの場の設置などが必要になってくるでしょう。産業面だけではなく、このようなまちづくりにどのような影響が想定されるのかについても、私たちはもっと勉強し、準備をしていく必要があると思えます。

また、ビッグデータや5Gなどを活用したスマートシティー産業も、大きな可能性を持っています。まち自体が研究開発、そして実践の場となり、さまざまな市民生活やまちづくり上の課題を解いていくということ。このような産業を育成す

ることで、仙台が住みやすいまちになるだけでなく、高い問題意識と課題解決能力を持った優秀な人材が仙台にとどまり、さらには流入してくる可能性が出てきます。

指針3 個性で稼ぐ商都

「商都・仙台」を担う商店街は、市民はもちろん、国内外から当地を訪れた人々が、仙台というまちの雰囲気を感じたいために、歩いて楽しむ空間でもあります。定禅寺通エリアと同様に、目的を果たすための「モノ」を消費する場から、「時間を消費する場」へと変わっていくことが、商店街にも求められると思います。そのためにも、地元で愛される居心地の良い店舗づくり、商店街の雰囲気づくりが急がれます。

そこで「指針3」では、にぎわいづくりの仕組みづくりや商店街のエアーマネジメントのほか、地域経済循環の強化、仙台らしさをデザインする支援機関の強化などを目的としたアクションプランを策定しました。伝統のある商店が、いまなお多くのファンを惹きつけてやまないのは、常に人々のニーズや時代の変化に対応し続けているからなのだと思います。商品やサービスを継ぐ時代ではなく、親から子へと受け継ぐ時代ではなく、いま、伝統を受け継ぎながら、商品やサービス

を人々のニーズに合わせていくことのできる人材を、地域として迎え入れることも、仙台ならではの伝統文化・技術を受け継ぐ若者の起業や、まちの課題を独自の手法で解決する社会的起業などを支援する仕組みづくりが必要です。

指針4 東北の拠点となる国際交流都市

4つ目は、東北の拠点として、仙台が中心となってインバウンド対応に磨きをかけ、アウトバウンドを増やし、情報発信を高めて仙台・宮城・東北のリーダーを増やそうというものです。

インバウンドに関しては、ゴールデンルートの旅を満喫して日本のファンになった方々が、次の目的地としてどんな場所や体験を求めているのか。それを探りながら、富士山や金閣寺とは異なる個性を、東北全体としてどう打ち出していくのが重要で、仙台は東北の玄関口としてのゲート機能に加えて、広域連携のけん引役を担い、東北らしさ、宮城らしさの発信内容や手法を探ることが、今後大きな課題と言えます。

指針5 若者を惹きつける文化創造都市

若者を惹きつける文化の存在は、魅力的な都市には欠くことのできない基礎的な要素ではないかと考えます。そ

して、これがあつてこそ、商業や国際交流、研究開発といった数々の取り組みが、さらに生き生きと輝き出すのではないのでしょうか。例えば、定禅寺通や西公園などを、スケートボードやスポーツバイクといった遊びを楽しむ人たちに開放することで、このような場所を求めている人たちが集まってくるでしょう。その様子も、それをカフェでお茶を飲みながら眺めている人も、すべてがまちの景色となるのです。そこにいる人が無意識にまちの雰囲気をつくり出す要素になっていること。これが市民ばかりでなく、来訪者を惹きつける、大きなポイントなのではないでしょうか。

好循環を生み出すには産学官の連携が必須

これまで、「チャレンジシティ仙台」の5つの指針に沿って、一部ではありますが、解説をさせていただきました。この5つの指針に共通するのは、「仙台というまちを、どのように使ってもらおうのかを考えることである」ということです。市民が主体となって、自分だったらどんなことがしたいだろうか、仙台がどんな

まちになってほしいかを考え、産学官が連携して同じ目標に向かって足並みをそろえ、戦略的に実現していくことが重要だと思えます。例えば、「スポーツやエンターテインメントの大会を誘致する」↓「そのためのシティーセールス用に、仙台の環境を伝えるPR動画を制作したり、映画のロケ地に採用してもらうなど、仙台の良さを拡散する」↓「仙台への興味を刺激された人たちが集まり、にぎわいが生まれる」↓「そのワクワクするような雰囲気が人をさらに惹きつける」↓「買い物だけでなく、飲食や宿泊、観劇や鑑賞などを通して、まちに滞在する人たちがお金を落とすとしてくれる」↓「その利益が、まち全体の活性化に貢献する」↓「まちの活発な動きに商機を見いだした事業者や企業が進出してくる」。このような循環を創出するのが、「チャレンジシティ仙台」の目指すところです。

今回、提言としてまとめたこの計画が、仙台市の総合計画や都市計画のマスタープランに反映されることも、仙台市の持続的な経済発展に向けて、関係者一体となって取り組んでいくきっかけとなることを願っています。

「チャレンジシティ仙台」の内容は当所ホームページに掲載しています。

<https://www.sendaicci.or.jp/petition/2019/11/post-6.html>

民間企業が考えるまちづくり①

「理想像」と「効果」を示して、民間投資を呼び込む工夫を



株式会社仙台協立
(仙台市青葉区)
代表取締役
うじえ まさひろ
氏家 正裕 氏

これまで定禅寺通を軸としたまちづくりに関わってきました。昨年10月には弊社が中心となって定禅寺通の一角にイスやテーブルなどを設置し、どのように利用されるのか、どんな問題点があるのかなどを探るべく、社会実験「定禅寺通ストリートパーク19」を行いました。これを通して改めて気づいたのは、定禅寺通の魅力を磨くには、この通りことだけを考えているだけでは実現できない難しさがあるということです。例えばアクセスの問題。自動車をどう走らせるのか、路線バスの運行をどうするのかなどは、当該エリアの整備で終わる話ではありません。また、私が生業としている不動産業の視点から申しても、既存の建物や場所を創出するには何が必要かを考え、場合によっては不動産をあっせんする企業やテナントの方々とも協議し、協力を得る必要があります。

まちづくりには、官民による連携が不可欠です。仙台市には定禅寺通活性化室が設けられ、官民組織「定禅寺通活性化検討会」が設立されるなど、行政と民間企業などが同じ方向を向いて、追い風に乗って歩み出したという手応えを感じています。ここで大切なことは、「定禅寺通エリアをこうしたい」という理想像を描き、関係者間で共有することだと思います。これが定まると、計画がより具体的になるとともに、その効果も予測できるようになります。それが民間投資を生むことにもつながるはずです。

私たち民間企業には、人を呼び、経済効果をもたらすアイデアの提案が求められています。1社では成し得ないことも、仙台・宮城、そして東北の将来を考え、夢を描く企業が集まれば、より魅力的な通りにすることができるよう。そのためには仙台というまち全体のバランスを考慮しながら、このエリアで商機が見いだせる将来像を描き、積極的に発信することが急務ではないかと思っています。

民間企業が考えるまちづくり②

データと人が集まることで「仙台発」を生み出したい



東日本電信電話株式会社
(仙台市若林区)
取締役 宮城事業部長
宮城事業部宮城支店長
東北復興推進室長
なかむら ひろし
中村 浩 氏

「人が集まり、出会いの中から新しいものを生み出す場になりたい」という考えの下、東二番丁通にある弊社の仙台中央ビルを2023年竣工に向け再開発しています。実は、この計画は以前からありましたが、放射光施設との連携や仙台市のまちづくりに対する考え方も合致したことから、目指す方向性が冒頭のように決まりました。このビルのオフィスフロアには企業の開発部門にも入居していただくよう考えており、研究者や学生が自分の研究テーマに関して企業の方々や気軽に情報交換できるコワーキングスペースも設けたいと考えております。また、地元の老舗企業やベンチャー企業が、新商品やサービスの開発、事業承継などに役立つ情報を共有できる場としての活用もあると考えているところです。

こうした場所の提供のほか、通信会社として、このビルで生まれる「コト」や「モノ」の発案から完成までをしっかりと下支えするのも、私たちの仕事だと考えています。例えば、弊社がデータセンターを活用し、仙台にいられた研究者や企業の方が、東京に戻ってもこの場所とつながることができる仕組みを提供します。こうした環境を長期的に構築することで、地元を離れて東京に就職した学生さんとも、つながりを維持することができそうです。

ビルの完成までに私たちが仙台・宮城エリアにおいてやるべきことは、AIや5Gなどの先端技術によって、仕事や生活がどう便利になるのか、実際に何ができるのかをお伝えすることで、具体例を示して、「自分事」として捉えていただく活動に力を入れていきます。そして、「震災前よりもまちが楽しくなった」、「ワクワクすることが増えた」と多くの方に実感していただければ、元気が取り組みを考えられる上で、ビル開発の先例になれるはずです。